天然格闘少女

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天然格闘少女

【Ｎコード】
Ｎ５０３４Ｉ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
格闘技の天才涼花。ところがこと恋愛に関しては奥手の彼女、その初恋はどうなるか。スクールランブルの一条かれんがモデルです。

第一章

天然格闘少女

「そんなに強いの？」
「滅茶苦茶強いんだよ、これが」
彼女のことは通っている高校では誰もが知っていることだった。
「もうな。異常にな」
「確か空手は三段？」
「あと剣道も三段だし柔道も二段」
少なくともどれも尋常なことではなれるものではない。有段者、それもまだ高校生でなれるものではない。それだけのものがあるのは誰でもわかることだ。
「あと薙刀も二段だったかな」
「それに合気道もこの前初段らしいし」
「滅茶苦茶強いよなあ」
「全くだよ」
皆彼女の強さに驚くばかりであった。
「実際あれだろ？電車の中で痴漢を一撃でのしたんだって？」
「そうそう、みぞおちに一発」
それで終わりだったのである。少なくとも普通の女子高生が決めるものではない。
「それでおしまい」
「何か中学生の時絡んできた不良グループ十人を一瞬で倒したそうだし」
桁外れの強さを示す話はまだ続くのだった。
「それだけ強いのにな」
「だよな。それでもな」
ここで話が変わるのだった。
「外見はあれだよな。全くな」

「見えないんだよな」
今度は彼女の容姿の話になるのだった。
「この前あれだぜ。芸能プロからスカウト来たらしいぜ」
「女優か？アイドルか？」
「アイドルでだよ」
そちらだというのである。
「それで声かけられてたぜ」
「だよな。外見は確かにそんな感じだからな」
「顔は可愛いし」
まずは何といっても顔であった。人間というものはどうしてもまず最初にその人の顔を見てしまうものでありからこれは当然であった。
「小柄でしかもスタイルはいいし」
「胸はないけれどね」
皆見るものは見ていると言っていい。
「アイドルになれるよね」
「歌だって上手だし」
どうやら天から二物も三物も与えられている女の子らしい。
「けれどあんなに強いのがね」
「謎よね」
皆でそんな話をするのだった。その女の子の名前は渡部涼花、黒いふっわりとした柔らかい髪を肩に少し捲きつく程度まで伸ばし横に流線型になっている目の光は穏やかである。頬は少しふっくらとしていて口は大きめである。眉は薄めだが奇麗なカーブを描いている。その彼女のことである。
彼女は学校では空手部等にいる。そこで今日も拳を振るっている。
「よし、一本！」
実際の試合を想定した稽古において見事に一本取っていた。蹴りが相手の腹に一直線に入ったのである。やはりその動きはかなりのものだった。

「凄いね、今日も」
「やるじゃない」
「そんなことないわよ」
稽古の後で声をかけてくる同級生達に笑顔で返す。にこりとしてとても可愛らしい笑顔だ。
「だって私今日は」
「調子はいいって」
「ねえ」
彼女と同じ黒帯の女の子達はそれは否定した。道場を思わせる稽古場では他には剣道部や柔道部も稽古をしている。どちらもやる彼女にとっては実に都合のいい場所であった。
「だってあんたさっきは柔道部の稽古してたじゃない」
「今日は柔道と空手ね」
「明日は剣道よね」
「うん、そうなの」
自分の白いタオルで顔の汗を拭いながら皆に答える涼花だった。
「朝の練習は空手部だけれど」
「やっぱり凄いわ」
「っていうか完全に格闘少女ね」
皆そんな涼花の話を聞いて感心することしきりであった。
「何かそればっかりって気もするけれど」
「彼氏とかいないの？」
「彼氏？」
彼氏という言葉を聞いて少しばかりそのアーモンドを真横にしたような目を丸くさせる涼花であった。その表情も実にいいものであった。

第二章

「彼氏っていうと」
「だから。彼氏よ」
「彼氏。いないの？」
「そんなの考えたことなかったけれど」
これが彼女の現実であった。
「ええと。彼氏って」
「だから。あんたももう十七でしょ」
「花の十七歳」
少なくとも青春と言ってもいい年齢であるのは間違いない。何かに打ち込むこともあれば恋を知る年齢である。華やかな青の時代である。
「それで何もしないっていうの？」
「彼氏の一人や二人どうなのよ」
「そう言われても」
困った顔を見せる涼花であった。
「ちょっと」
「ちょっとじゃなくてよ」
「そっちもちゃんとしなさいよ」
周りの言葉が真面目なものになる。
「わかってるの？そこんところ」
「どうなのよ」
「どうなのよって」
応える涼花の顔がさらに困ったものになっていた。
「私そんなことは」
「考えたことないの？」
「全然」
「言われたのもはじめてだし」

これが現実であった。
「ちょっと、やっぱり」
「やれやれ。武道もいいけれど」
「そこんところもしっかりしなさいよ」
皆ここで呆れることになってしまった。
「恋せよ乙女」
「命短しってね」
何処かのオペラの登場人物かゲームのキャラクターの言葉を思わせるものであった。
「それもあれよ。恋をするにはよ」
「恋をするには？」
「いい男とすることよ」
友人達はこう彼女に言うことも忘れない。
「いいわね。いい男と恋をするのよ」
「それもいい恋をね」
「いい男といい恋を」
涼花はそれを聞いてとりあえずはきょとんとした顔になった。今一つ以上にわからないといった顔で。その顔で皆の話を聞くようになっていた。
「するの？」
「間違ってもいい加減な男と恋をしたら駄目よ」
「そう、例えば」
ここで彼女達が出す名前といえば。この名前であった。
「今鳥暢雄みたいなのはね」
「絶対に駄目よ」
顔を顰めさせてこう涼花に話すのであった。
「絶対にね。いいわね」
「あんな軟派男にはね」
「軟派男なの、今鳥君って」
ところがであった。肝心の涼花はどうかというとそれを言われて

もやはりきょとんとした顔になったままである。わかっているのかいないのかというと何処をどう見てもわかっていない顔をしている。その表情が実に初々しいがそれ以上に何かもどかしいものも見えていた。

「そうだったの」

「あのね、あいつの何処がそうじゃないって言えるのよ」

「軟派じゃないって」

友人達は今の涼花の言葉に顔を顰めさせた。そうしてそのうえで彼女に対してまた語るのであった。どうしても語らずにはいられないといった顔で。

「しょっちゅうあちこちの女の子に声ばかりかけて」

「しかも喧嘩はからっきしだし」

女の子達の顔は顰められたままであった。

「それでどうしていいって言えるのよ」

「そこんところがずれてるのよね、涼花って」

「今鳥君が別に悪いようには思えないけれど」

しかし涼花はきょとんとした顔をそのままに語るのだった。

「別に」

「やれやれ。こんなにおぼこいんじゃ大変ね」

「全くよ」

女の子達は今度は呆れた顔になった。言うまでもなく涼花があまりにも何もかもを知らないのでそれで呆れているのである。やはりこれしかなかった。

第三章

「まあいいわ。あんたなら襲われても簡単に撃退できるし」
「それも何人が相手でもね」
彼女の戦闘力については誰もが知っていることであった。
「まあ相手を見つけてね」
「いい恋をすることね」
「わからないけれどわかったわ」
こんなどうにもあやふやな涼花の返答であった。こうした危ういと出て来たのであった。
彼女であったが皆が名前を出したその軟派男が。彼女の前にふらり
「ねえねえ、渡部さん」
「あっ、確か」
彼女の前に出て来たのは背の高い少年だった。年齢は涼花と同じ位である。すらりとしていてブレザーの制服を格好よく着こなしている。
茶色に染めてある髪は女性で言うボブにしていて眉は一直線である。強い光を放っている目は笑っていて口元もそれに続いている。頬がすらりとしていて端麗と言ってもいい顔であった。
「今鳥君？」
「あっ、俺の名前知ってたんだ」
その彼、渦中の人物である今鳥暢雄は涼花の言葉に笑顔で応えた。
「俺も結構有名になったんだな」
「確か軟派で女の子が大好きな」
涼花はここで周りから聞いた彼の話をそのまま出したのだった。
「それでいい加減で遊び人の」
「ちょっと、そりゃないよ」
そしてそう言われて苦笑いになる暢雄だった。
「それは嘘だって。デマだよ、デマ」

「デマなの？」
「そうだよ。俺って実は真面目なんだよ」
そしてこう涼花に言うのだった。
「それも凄くね。もう一直線だよ」
「そうだったの」
「そうだよ、そうなんだよ」
とはいっても目が笑っている暢雄であった。それがどうにも胡散臭いのであるが涼花はそれには気付いていない。しかも全く、であった。
「だからさ。その真面目な俺からの御願いなんだけれど」
「何？」
「デート。行かない？」
実に単刀直入であった。
「デート。どうかな」
「デートっていったら」
「今話題のあの三国志の映画」
彼が出したのはそれであった。
「それのチケットが二枚手に入ったんだよ」
「三国志の映画っていうとあの赤壁がどうとかいう？」
「そうそう、それそれ」
かなり天然な調子の涼花に合わせる状況になっていた。それと共にリードもしてはいる。
「その映画。どうかな」
「私の弟が三国志とか好きだけれど」
まずはこう述べる涼花だった。
「そうなの。三国志なの」
「うん、三国志」
また彼女に告げた。
「どう？よかったら」
「そうね。よかったら」

しめた、暢雄は今の彼女の言葉に内心笑った。実を言えば目にもそれは出てはいたが幸いにして涼花は天然でそれには気付かなかった。彼にとっては実に都合のいいことに。
「行ってもいい？」
「いいよいいよ、絶対に来てよ」
これで勝った、そう確信した。ところがであった。
「その弟も一緒に連れて来るから」
「えっ！？」
この言葉を聞いて唖然としない者はいない。暢雄でなくとも。
「今何て？」
「だから。弟三国志好きなのよ」
天然な調子の涼花の言葉は続く。
「だから。その弟も一緒にって考えてるけれど」
「弟さんも一緒って」
「駄目かな？」
涼花の表情も言葉も相変わらずだった。
「それじゃあ。三人でデートって」
「三人でデート」
こう言われて口をシャコ貝のようにさせてしまった暢雄だった。
「二人じゃなくて」
「デートって絶対に二人でするものなの？」
「いや、決してそうとは限らないけれど」
ここでは妙に正直になる暢雄だった。
「別にね」
「じゃあ三人でもいいのね」
「まあね」
流れから頷くしかなくなってしまっていた。
「それじゃあ三人で」
「チケットもう一枚あったらいいけれど」
「ああ、それは任せて」

このことにも正直に答えるのだった。やはり話の流れからそうなってしまっていた。

第四章

「こっちでちゃんとするから」
「そう。それだったら」
「ええと、それでその日は」
時間は彼が決めることにした。とりあえず最低限の主導権は握ってはおきたい、そう判断したが故のことである。彼にしろ当然ながら魂胆があるのだ。決して見せはしないが。
「今度の日曜でいいかな」
「うん、それでいいよ」
とりあえずこれでデートの話は決まった。その話を聞いた涼花の友人達の反応はというと。
「えっ、マジで？」
「あいつとデートするの？」
「うん。駄目かな」
驚く周りとは正反対に涼花はいつも通り呑気な調子であった。能天気なまでに。
「今度の日曜」
「あんたねえ。狼の巣に入りたいの？」
「子羊でありながら」
これまた随分な言葉であった。
「どうなっても知らないわよ」
「美味しくいただかれるわよ」
「美味しくって？」
「あのね、男は猛獣よ」
「狼なのよ」
話がわからないといった感じの涼花にさらに言う彼女達だった。
「その狼が待ち受けるのにのこのこ行くなんて」
「正気なの？本当に」

「うん、そうだけれど」
如何にも心配で不安そうな彼女達に対して肝心の涼花はどうかというと。本当に何も変わらず能天気なまでにあっけらかんとした様子であった。
そしてそんなあっけらかんとした顔で。また言うのだった。
「弟と一緒にね」
「えっ、弟さんって」
「何でそこであんたの弟さんが話に出るのよ」
「三国志の映画のチケット貰ったのよ」
その暢雄から貰ったものである。
「それでね。うちの弟が三国志が好きだから一緒にって」
「それで弟さんもなの？」
「デートに一緒に？」
「うん」
いぶかしむ顔になる友人達にあっさりと答える。そのあっさりさ加減ときたらそれこそママカリのようなものであった。ここまであっさりとしているのも珍しかった。
そのあっさりさのまま涼花は。さらに言うのだった。
「そうよ。三人でね」
「三人だと大丈夫かしら」
「そうね」
ここで友人達の態度が変わってきた。それは表情にも出て来ていた。
「弟さんが一緒ならね」
「あいつもそうは下手なことしないわね」
「目付けだからね」
確かに二人でいるよりは三人であった。これはデートにおいても言えることだった。ただし三人のデートというとここにいる誰もが聞いたことがないものだった。
「じゃあ安心していいかしら」

「少なくとも涼花一人だけよりはね」
「それにしてもデートね」
ここでにこりと笑う涼花だった。
「楽しみよね。何かね」
「そういえばあんた初デートだったわよね」
「男の人と付き合ったことないのよね」
「横に並んで歩いたことはあるよ」
友人達の問いにこう答えはした。
「ちゃんとね。何度も」
「あれっ、それって何時なの？」
「何時の間に」
並んで歩いたとなるとそれだけでちょっとしたデートである。それで皆興味を持って涼花に対して問うのであった。問わずにはいられなかった。
「あんたも隅に置けないっていうか」
「意外とやる？」
「小学校の時地域で集まって」
しかしここで涼花は言うのだった。
「登校するじゃない。一年生から六年生まで」
「？それはそうだけれど」
「それがどうかしたの？」
皆それを聞いてまずはきょとんとした顔になった。涼花の言っていることがわからなかったのだ。いきなり小学生の話が出たからである。

第五章

しかしそれでもだった。皆は涼花の話を聞いた。とりあえず聞かないとわからないからだ。
その涼花はさらに。こう続けてきた。
「その時男の子と一緒に並んで登校したから」
「そんなの誰だってあるわよ」
「そうよ」
ここまで話を聞いて呆れる皆であった。
「全く。何かって思ったら」
「そんなのは一緒に並んで歩いたって言わないわよ」
「そうなの」
わかっていないのは涼花だけだった。呆れた顔になる皆に対してこれまでと表情は全く変わらない。そこにはっきりと出ていた。本人だけが気付いていないが。
「とにかく。はじめてのデートね」
「三人で」
「うん。どうなるかな」
話は戻った。涼花の周りの皆も呆れた顔から真面目な顔になってそれで話を戻していた。
そうしてその顔で。さらに涼花に言うのだった。
「弟さんがいるから相手もまずいきなり変なことはしないと思うけれど」
「いい？」
一人が念押しをしてきた。
「何かしてきたら容赦しなくていいからね」
「一気にやっちゃいなさい」
「一気になの」
「そうよ。投げるなり殴るなりして」

「武器使ってもいいから」
剣道や薙刀まで使える涼花をわかっての言葉である。
「それでやっつけちゃいなさい。いいわね」
「女の操はダイアモンドより高いからね」
こんな話をしているうちにその日曜日になった。今時のジーンズにシャツのラフな格好で待ち合わせ場所にやって来た暢雄が見たものは。
「えっ、何その格好」
「おかしいの？」
「おかしいっていうかさ」
涼花の服装を見て唖然としているのだった。何と彼女は桃色の振袖を着ている。しかもそこには白い桃の花と枝まで彩られている。見事な絹の着物であった。
丁寧に帯まで締められている。暢雄はその涼花を見て唖然としているのであった。
それで唖然としたまま。こう言うのだった。
「和服・・・・・・なんだ」
「デートだから」
これが涼花の言葉だった。
「やっぱり。正装しないといけないと思って」
「いや、デートってそういうものじゃないから」
暢雄は戸惑いながら涼花に継げた。
「もっとさ。ラフにね」
「着物じゃなくていいの？」
「いいよ、全然いいから」
戸惑った言葉は続く。
「本当に。俺みたいにラフでいいからさ」
「そうだったの」
「そうだよ。まあ着て来たものは仕方ないから」
それはもう諦めるしかなかった。今更言ったところでどうしよう

もなかった。
「とりあえずさ」
「映画館よね」
「うん。それで弟さんは？」
　このデートは二人だけで行われるものではない。三人だ。それがわかっているからこそ今涼花に対して彼のことを尋ねたのであった。
「何処にいるの？ちょっと見えないけれど」
「ここにいるわよ」
　しかし涼花はこう言ってきたのだった。
「ここにね。ちゃんといるわよ」
「ここにって！？」
　涼花の言葉を聞いてとりあえず周囲を見回すのだった。しかし目に入るものは。
　赤ん坊を入れて運ぶ手押し車だけだった。他にはこれといってない。小さな子供の姿すらない。暢雄としてもいぶかしむしかなかった。
「誰もいないけれど」
「いるわよ」
　涼花はあくまでこう主張するのだった。
「ほら、ここに」
「ベビーカー！？」
　涼花はそのベビーカーを指し示す。暢雄はその指とベビーカーを見てさらにいぶかしむ顔になった。それと共にまさかとも思いはじめた。
「ひょっとして」
「そうよ、弟よ」
　にこりと笑って話す涼花だった。

第六章

「これが弟なのよ。一歳になったのよ」
「一歳って」
その年齢を聞いて今度は唖然となった暢雄だった。
「弟さんって一歳だったの！？」
「あれっ、言ってなかった？」
驚きがそのまま顔にも声にも出ている暢雄に対して涼花はいつも通り呑気な調子だった。
「言ったと思うけれど」
「弟さんがいるっていうのは聞いたけれど」
実際に彼が聞いたのはそれだけであった。
「まだ一歳だなんてのは」
「聞いてなかったの」
「聞いてないよ」
ここでも驚きをそのままに言う。
「全然、何もかも」
「そうだったかしら。言ってなかったの」
この能天気さは相変わらずだった。
「じゃあ今わかったからいいわよね」
「よくないよ」
もう自分のペースを完全に崩しながら応える暢雄だった。
「まだ一歳の子をデートに連れて行くの？」
「駄目？それって」
「駄目とかそういうのじゃなくてさ」
何もかもがわかっていない感じの涼花に対して空しい抵抗を続ける暢雄だった。さながら敗北することがわかっていながらも行う戦争であった。
その敗北が決まっている中で暢雄は。それでも言うのだった。

「あのさ、そもそも一歳でさ」
「うん」
「三国志わかるの？」
　これも聞きたいことであった。どう見てもまだ言葉も何もわからず当然文字も読める筈がない。それでどうして三国志がわかるというかだった。
「本当に。わかるの？」
「この前三国志のゲームね」
「ゲームね」
「お父さんがやってたけれど」
　暢雄はここまで聞いただけでおおよその察しがついた。しかしそれはあえて言葉には出さず話を聞き続けるのであった。それでもであった。
「それ観て笑ってたから」
「それで三国志が好きなんだ」
「いつもゲーム観て笑ってるから」
　だからだというのだった。
「三国志好きなの。わかるわよね」
「まあね」
　内心思っていることは隠して応えるのだった。
「それはね。わかったよ」
「そうよね。じゃあ行きましょう」
「弟さん。連れてだよね」
「孝まだ一歳よ」
　この赤ん坊の名前だった。
「それで放っておくことなんてできないじゃない」
「それはそうだけれど」
　暢雄はそれでも言いたかった。問題はそこではないと。そもそも高校生同士のデートで一歳の男の子を連れてデートをするというのは。まず有り得ないことだからだ。

「三人でデートだよね」
「うん、約束だよね」
「まあそれはね」
完全に涼花のペースの中で頷く暢雄だった。
「それじゃあ。映画にね」
「行こう」
「わかったよ」
白旗を掲げた気分で頷くしかなかった。そのベビーカーは自分が持ちそのうえで映画館に向かった。こうして三人でデートをして最後は。また駅前に戻ってきたのだった。
「楽しかったね」
「まあね」
暢雄は疲れ切った顔で涼花に応えた。
「はじめてのデート。どうだった？」
「孝も喜んでくれたし」
「喜んで、ね」
暢雄は涼花の話を受けてその赤ちゃんを覗き込んだ。それと共に今日のことを思い出すのだった。
まずおしめを取り替えてそこで顔におしっこを受けた。うんこも処理してその臭さも覚えている。
映画館で泣き叫んで涼花と一緒に必死にあやして静かにさせた。ミルクをやろうとして零しそうになってこれまた大騒ぎになった。しかも何故か涼花が自分のおっぱいを飲ませようとして胸を出そうとしたりもした。彼はそれを見て慌てて止めたりもした。
高校生で親子連れかと思われ周囲の目がとにかく痛かった。夕暮れの赤い世界の中でそれを思い出し暗澹たる気分にさえなっていたのだった。
その中でこの涼花の言葉は彼にとっては。追い打ち以外の何者でもなかった。

第七章

しかしその追い打ちを受けても彼は。まだ立っていたし応えてもいたのだった。
「まそれだったら」
「いいわよね」
ここで涼花のにこやかな笑顔だった。
「喜んでくれたから」
「喜んでくれたら、か」
「デートってね。聞いたんだけれど」
そして涼花はさらに彼に言ってきた。
「お父さんとお母さんにね」
「渡部さんの？」
「うん、うちのお父さんとお母さんにね」
彼女の両親からだというのだった。
「聞いたけれど。楽しんで喜ぶものなのよね」
「まあそれはね」
この言葉には頷くことができた。はっきりと言ってしまえばその通りである。彼もこの言葉そのものには何の異論もないのだった。
「その通りだよ」
「じゃあ今日のデートは成功ね」
涼花の能天気な言葉は続く。
「だったら」
「そうだね」
少し頭の中で考えたが言われてみればその通りである。だから頷くことにしたのだった。
「それはね」
「じゃあ今度の日曜もデートする？」
何と涼花の方からの提案であった。

「また孝と一緒に」
「三人一緒になんだ」
「駄目かしら」
ここで暢雄の顔を無意識のうちに覗き込んできた。
「それじゃあ」
「ええと、それはね」
正直なところ今日はもうかなり疲れてしまった。それが誰のせいかはもう言うまでも、考えるまでもなかった。結論から言ってもう勘弁して欲しい話であった。しかし。
今の涼花の覗き込んできた顔を見るとそれをどうしても。断れない自分がいることにも気付いてしまいどうしても断ることができなかった。
そして断れないと出す言葉は。これしかなかった。
「わかったよ」
「いいのね」
「うん、いいよ」
その顔を見てはこう言うしかないのだった。
「それじゃあ今度の日曜もね」
「三人でね」
「デート、しよう」
このことを約束する。暢雄にとっては不本意だったがそれでも悪い気はしなかった。それがどうしてかは自分でもはっきりとはわからなかったが。
このことはすぐに学校の中で話題になった。この弟連れのデートのことは。
「赤ちゃん連れってねえ」
「あいつも気の毒だったな」
「いい薬じゃない？」
「そうよ、あいつにはね」
あいつが誰かはもう言うまでもなかった。

「いつもいつもお調子者なんだから」
「たまにはいい薬よ」
「そうそう」
女の子達からの意見である。やはり女の子は怖い。

第八章

「けれどまあ。見直したかな」
「結構ね」
しかし同時にこうも言われるのだった。
「あれで結構いいところあるじゃない」
「普通はあんなのできないわよ」
「できない？」
男の子達はそんな女の子の言葉を聞いて顔を向けるのだった。
「できないのかよ、あれが」
「どうしてなんだ？」
「だから。高校生であれよ。赤ちゃんを連れてのデート」
「これ、できる？」
女の子達はこう男の子達に問い返すのだった。
「私なら絶対に無理よ」
「私も」
「涼花は全然平気だったみたいだけれど」
これもまた凄いことに思われていた。少なくともこの学校でそれをしたのは涼花だけである。とてもできるものではないということだ。
「それでもね。相手は」
「あいつでもね」
「そういうものか？」
「ちょっとわからないけれどな」
男の子達は今一つ実感できないでいた。
「けれどあれだな。何ていうかな」
「赤ちゃんと一緒なのはやっぱり大変だろうな」
「だろうな、じゃなくて実際に大変よ」
「そうそう」

こうしたことは実感できる女の子達だった。ここに男の子と女の子の違いがはっきりと出ていた。やはり子供を産んで育てるのは女だからだ。
「それに付き合ったあいつって」
「見所あるじゃない」
「見所あるのか」
「そうみたいだな」
それを言われてもやはりあまりよくわからない男の子達だった。それぞれ顔を見合わせてそのうえできょとんとした顔になっていた。
「けれどまあ。それだったら」
「あいつにとってもいいことだよな」
「涼花は強いけれど天然さんで」
これはまさにその通りだった。
「あんな娘だけれど」
「そんな娘と最後までデートできるなんてね。やるじゃない」
何につけてもそれなのだった。
「これはひょっとしたらね」
「いいカップルになるかもね」
そしてこうも言われるのだった。
「見守っていこうかしら」
「そうね」
「まあそれは賛成するさ」
「俺もな」
男の子達もこれには賛成するのだった。
「さて、あの二人これからどうなっていくかな」
「ちょっと以上に見ものだよな」
ここで二人を見る。見れば空手の道着を着ている涼花に暢雄が話し掛けていた。随分と明るい顔である。
「それで日曜はね」
「空手の試合でいいわよね」

「空手って」
「お母さんが試合に出るのよ」
実に清々しい顔で話す涼花であった。
「だから。一緒に観ましょう」
「空手の試合を観るデートかあ」
暢雄はその提案を受けて困った顔になっていた。
「それってどうなのかな」
「面白いわよ」
涼花は相変わらずの調子だった。
「空手の試合。だからね」
「うん。それじゃあ」
「一緒にね」
今度は晴れやかな笑顔であった。
「デート。しようね」
「わかったよ。じゃあもうこうなったら」
ここで暢雄も腹を括った。一度デートしてそれを乗り越えた。それに約束もした。それなら、と意を決したのである。彼にも意地というものがあった。
「最後まで付き合うよ。それでいいよね」
「うん、最後までね」
涼花の笑顔はここでも晴れやかだった。暢雄はもう一度その笑顔を見て決意を固める。とにかくこうなったら最後までいこうと。そんな二人だった。

天然格闘少女　　完

２００９・８・２

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5034i/

天然格闘少女

2010年10月8日15時26分発行